

男女共同参画雑感

Gender Equality in Japan: My Impression

大久保 政芳 Masayoshi OKUBO

過日、小学一年生になった孫娘の運動会にでかけた。学会で使うのと同様の名札カードをぶら下げて校門に入る。そこで見る光景に驚く。騎馬戦や棒倒しと聞けば、まさに運動会の定番であろう。現在はそれぞれ二人の子供の母親、父親になった長女と長男のときにも少しは父親としての役目は果たしたつもりである。つまり、自分の経験との比較ではない。その驚いたこととは、それぞれが男女混合で行われたことである。前者はたしかに以前に目にしているような気がする。しかし、後者は我々の時代には活発な男子の花の舞台であった。それがどうであろう。攻める側にも守る側にも女子がいる。怪我をしないだろうか。女子の両親からクレームがつかないのだろうかと心配をする。まあ、昨今の Monster Parents が問題になる時節であり、そんなことは検討済みであろう。ということは、35才前後の年齢の男女にとっては至極当然のことに思われているのであろう。

そこで、改めて当日のプログラムを見る。自分達の時代には○年生男子による△△とか、逆に○年生女子による△△という出し物が結構あった。それが全くない。まさに男女共同参画が実践されている。よく見ていると女子が、棒を守っている男子の頭のあたりに飛びかかっている。壮観というべきか……。

今回、研究室に女子学生が多くいる（数名程度なのだが）ということで、男女共同参画担当委員の方から執筆の依頼があった。困った、この原稿は難しい。しかし、その委員長の東北大学の栗原和枝教授とは理事会の会合でよくお会いし、女子正会員（現在約5%）の比率を学生会員（20%）並にあげたいと努力されていることをよく知るだけにNoはいえない。

話を戻すと、もう大学を含めて学校レベルでは完全に男女共同参画状態にあり、問題はない。それが問題だという考えにはここでは言及しない。毎年、講義の前に手にする名簿はアイウエオ順であり、男女の区分けはない。研究室に入っている女子学生は、私達の方

が力がありますからとさっさと重いものを運ぶ。その他いろいろ、……敢えて省く。

一昨年の某日、ある企業の人事の方が来研され、女子学生を（“も”ではなく“を”）是非採用したいが、どうしたら良いかとの相談を受けた。どこの大学にうかがっても先生方が女子は元気で優秀だといわれるのでとのことであった（誤解があるといけないので、念のためにいっておく。男子は元気がなく優秀でないとは言っていない!）。何かの参考になればと、すでに内定をもらっていた3名の女子院生を紹介し、懇談をしてもらった。つまり、十数年前当時にいわれていた女子院生の就職での不利さが消えている。これは、この間に実社会にでた先輩達の努力が大きいと思う。

5年前に研究室内にGASP委員会を立ち上げ、研究室の構成員から選ばれた委員が8名ほど集まって原則的に毎月開催している。アカハラ(A)、セクハラ(S)、パワハラ(P)はすぐに理解されるが、Gは説明が必要であろう。ガクハラのGである。会が始まると真っ先にG委員の鈴木 登代子助手に尋ねる。学生(G)さんにいじめられていませんかと。ありませんとの返答がでると、私もありません、お互いに良かったねと喜びを分かち合う。学生の委員からも笑いが出る。S委員ではまず男子委員に女子学生にセクハラされていませんかと尋ねる。ありませんとの返答に、また同じく良かったね。もちろん、つぎに女子委員にも尋ねる。きちんと記録をとって残す。狙いは風通しを良くしてお互いの信頼関係を醸成することにある。

20年後には、“女男”共同参画と言葉が変わっているかもしれない。しかし、それでは困る。立場が入れ変わっただけでは進歩がない。私の言いたいことは、相手の立場になってものを考えるようにしようということである。そのことがスムーズにいけば、男女の共同参画がうまくいかないはずがない。仲良く知恵を出し合ひましょう。



大久保 政芳 Masayoshi OKUBO

神戸大学大学院工学研究科応用化学専攻・教授
工学博士

1971年神戸大学大学院工学研究科修士課程修了
高分子コロイド化学
E-mail: okubo@kobe-u.ac.jp